

HANDS



いつもの暮らしに、いつものあなた
小倉記念病院





HANDSは100号を突破しました。

1999年12月に創刊した小倉記念病院広報誌。「はんす」という名称は、複数の手で連れから約25年、年4回の季刊誌である本誌は最新治療を中心にお届けしてまいりました。こHANDSとして、引き続きよろしくお願いいたします

誌は、2025年発行の今号で100号を迎えま携を象徴するイメージで名付けられました。そ地域連携を深めるために、各診療科におけるれからも地域のみなさまのお役に立てるします。

100



HANDS新旧担当者と デザイナー3人が語る制作秘話

HANDSが「はんず」からリニューアルされた経緯

松本 企画広報課が設置され、ホームページリニューアルが広報活動を本格的に始めるきっかけとなりました。ブランド感を統一するために、広報誌「はんず」も僕が手がけるようになり、現在の「HANDS」へ変更しました。どこの病院とも違う、新しいものに取り組む小倉記念病院らしさが伝わるような広報誌を作ろうと考えました。

青野 貴船町から現在の浅野に移転したタイミングで、広報を一括で管理する体制が生まれ、歯車が一気に回りはじめました。それまでの「はんず」から「HANDS」に変える際に、ターゲットを地域の病院に絞り、何度も読み返せる医療専門誌にしようというコンセプトを打ち出しまし

た。特集内容を1つに絞ったことで、ストレートに伝わりやすいものになり、院外はもちろん、院内にも医療に携わる誇りやモチベーションをもたらせるものになったと思っています。

印象に残っていること

松本 広報誌は写真がとても重要です。リニューアル当初はオペ室やカテ室での撮影は緊張しました。手術中の先生方に近づかないと力強い写真は撮れないのですが、なかなかあと一歩が踏み出せない。そんな時に看護科長さんたちが誘導してくれて助けてくれました。僕だけでなく、小倉記念病院のみんなで作っていたHANDSだと思っています。

松下 私は広報に携わって初めて一眼レフを触った初心者だったので、いまだに奇跡の1枚を求めてかなりの枚数を撮影しています(笑)。いつも先生方やいろいろな部署の方々が協力してくださり本当に助かっています。

青野 ピアノ、自転車、マラソンなど先生の趣味を紹介し、内面を知ってもらう回は面白く、医療とは違った面で安心感を与えてくれています。HANDSに関わることで、ホームページの企画が、地域との接着剤になったことは大きいですね。シャボン玉石鹸、ギラヴァンツ、湖月堂など様々な対談が行われ、お互いの広報で発信しあい、コラボ商品も数多く生まれました。痛快だったのは、小倉商業高校がホームページにアップされると生徒さんたちから喜ぶツイートが溢れて、バズったことですね。

広報誌が果たす役割とこれからのHANDS

松本 現在は医療機関専門のマーケティング会社を営っていますが、やはりどこの病院でも紙媒体の認知機能はとても重要な役割を果たしてくれます。自分たちの医療をきちんと伝えることで地域医療に寄与することに繋がりますし、地域の先生方も安心して紹介しやすいですね。小倉記念病院の先生方はこういったことを理解して協力していただけたので、顔が見える広報誌にも繋

がったかなと思います。

松下 今回地域の先生方にコメントをいただくにあたり直接ご挨拶に伺いましたが、日々お忙しい先生方と当院を繋ぐ大切な役割が広報誌にはあるんだと実感しました。今はペーパーレスが叫ばれていますが、紙媒体の良さは情報の信頼性や安心感を伝えることにあります。100号でのリニューアルではユニバーサルデザインに基づいたフォントに変更し、より多くの方に視覚的に見やすく、目に留めてもらえる誌面作りを目指したいと思っています。松本さんと青野さんが作ってきた『HANDS』を踏襲しつつ、地域とのつながりを意識した企画を、今後も様々な広報活動で行いたいですね。

松本 いつも新しいHANDSが出るのを楽しみにしています。微力ながらその歴史に携われたことが僕の誇りです。小倉記念病院は常に新しいことに取り組む病院。広報誌もどんどん進化させて、地域の先生方に愛され続ける媒体として続けていってほしいですね。

(株) アド・ベンコーポレーション
(56号～現HANDSデザイナー)

青野 高広

小倉記念病院 総務課主任
(現HANDS 広報担当)

松下 陽子

合同会社つなぐ
(56～91号HANDS広報担当)

松本 卓

01

企画立案

HANDSは年4回の発行の季刊誌です。常に最新デバイスやオペに関する新しいトピックスを収集しています。どの診療科のこういった治療を特集するかを上司と相談し、医師とも連携をとりながら企画を練っていきます。

02

デザイン打ち合わせ

企画が決まったあとはデザインの打ち合わせをデザイナーと行います。まずは、デザイナーに特集内容を説明します。細かい医療の内容を把握してもらうことはデザインを行う上で重要なポイントになります。その後、原稿内容や写真点数などページごとに構成を詰めていきます。

03

デザインラフ→事前申請

原稿作成や写真撮影前に、全体のイメージを掴むためデザイナーにデザインラフを作成してもらいます。これがあることでその後の進行がスムーズになります。この段階で、この内容で進めていいかの承認を得るため上司、事務長、病院長に事前申請をします。

04

原稿作成

特集する診療科の医師から情報提供を受けながら、様々な資料をもとに原稿を作成していきます。インタビューがある場合はスマホで録音をし、原稿を作成します。最近では自動で書き出しを行うアプリを活用し、そこから修正を加えていきます。原稿の内容に誤りがないかを必ず医師にチェックしてもらいます。

05

撮影

デザインラフをもとに撮影を行います。広報で撮影する場合もあれば、内容によってプロのカメラマンに依頼する場合があります。スケジュール調整を各部署と密に行うことがとても重要です。病院内での撮影の場合は撮影場所の検討も必要です。写真が出来次第、デザイナーへデータを共有していきます。

06

デザインカンパ

原稿と写真が揃い次第、デザイナーに共有し、デザインカンパを作成してもらいます。この段階で一旦、ページ全体が完成します。

07

校正→修正→完成

校正は、医師に確認をとりつつ、広報でも合わせて行います。デザイン会社や印刷会社でも同時に文字校正を行います。校正→修正を繰り返し、HANDSは最終段階へ。

08

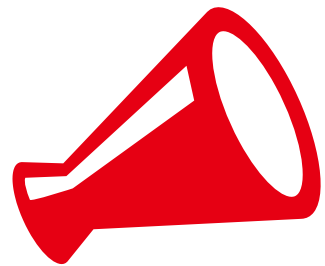
稟議承認

特集の診療科の主任部長をはじめ、上司、事務長、病院長に最終デザインの確認を行います。稟議はデジタルでの承認のため、以前より格段に承認までのスピードが早くなりました。内容に修正の指摘が入ればここでも修正を行い、再度確認をしてもらいます。

09

印刷→納品

内部校正を終え、稟議が通るとデザイナーへの印刷入稿の指示を出します。院内で掲出するHANDSと各病院、市民センター、メディア等への配布用HANDS（配送センター納品）と分けて納品されます。



HANDS100号を記念して、
病院の方々からお祝いコメント
をいただきました。



医療法人
かわい腎臓内科・泌尿器科クリニック
(小倉北区)
副院長 川井 康弘

 HANDS100号のご発行、誠におめでとうございます。長年にわたり、地域はもとより日本の医療発展に多大なご尽力を賜り、深く感謝申し上げます。貴院の今後ますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。



医療法人
森林クリニック
(小倉北区)
院長 占部 善清

 常に地域の基幹病院として役割を果たしていただいております。深く感謝します。歴史ある記念病院ですが、同時に国内でも有数のリーディングホスピタルとして機能されており非常に頼もしく感じます。今後とも益々ご発展を祈念します。



医療法人
峯崎内科クリニック
(八幡東区)
院長 峯崎 智久

 『HANDS』100号、心よりお祝い申し上げます。最新の医療情報から多くの気づきを頂くとともに、各科の綿密な連携に深く感銘を受けております。今後のさらなるご発展をお祈りいたします。



医療法人
いまい医院
(若松区)
院長 今井 慎

 広報誌100号おめでとうございます。いつも安心して患者さんを紹介でき、またスタッフの皆さんの温かい対応に感謝し、本当に心強く感じております。これからもよろしくお願いいたします。



医療法人
中村正内科循環器科クリニック
(小倉北区)
院長 中村 正

 高品質な冊子には毎回驚きます。光や深度などが極めてプロフェッショナルな写真で敬服です。医療レベルの高さを理解しやすい冊子となっており、毎回楽しみにしております。



医療法人
沖田クリニック
(小倉南区)
院長 沖田 聡

 HANDS100号!おめでとうございます。医療の進歩は目覚ましく、いつも興味深く拝見しています。小倉記念病院OBとしては、この発展を支えてこられた職員の皆様方に感謝をするとともにこの病院の一職員として働けたことを誇りに思います。



医療法人清光会
藤井眼科医院
(門司区)
院長 藤井 清一

 広報誌第100号おめでとうございます。医療情報や医療連携を充実できる広報誌で毎号楽しみに読んでおり、日頃から救急時対応していただき感謝しています。これからも積極的に地域医療連携を支えていきたいと思っています。



医療法人
白石胃腸科内科医院
(小倉北区)
院長・理事長 白石 慶

 第100号、おめでとうございます。毎号の様々な特集が楽しみです。当院は昨年、開院50周年を迎えました。50年以上、病診連携していただきありがとうございます。医療と地域を結ぶ広報誌「HANDS」がこれからもずっと続きますように。



医療法人
池園医院
(戸畑区)
理事長・院長 池園 友

 この度は広報誌100号のご刊行、誠におめでとうございます。小倉記念病院さんとの連携は当院にとって非常に大切であり、特に循環器内科の皆さまには、いつも確かな診断と温かなご対応をいただき感謝しております。



医療法人
はまさき循環器内科
(行橋市)
院長 濱崎 直也

 広報誌 100号おめでとうございます。24時間、365日、断らない病院として地域医療に貢献していただいております。これからの益々のご発展を祈念いたします。

HANDS

100号の刊行を祝して

このたび、小倉記念病院が地域の病院やクリニック、患者さんにお届けしてきた広報誌「HANDS」の刊行が100号という節目を迎えるにあたり、病院長として一言お祝い申し上げます。

まず、当院が貴船にあった頃の「はんず」の時代からその作成にあたり、浅野に新築移転して「HANDS」にリニューアルしてから次々と新しい発信を続けた広報課職員の企画力と継続力を称えます。時代の変化に対応し、読者のニーズを汲み取りながら、毎号新鮮な内容をお届けしてきた努力は、まさに職員の誇りとするべき成果です。

さらに、HANDSに登場してきた歴代の当院のスターたちにもお礼を申し上げます。医療人として彼らの活躍が記事の品質を支え、その結果として長年にわたり地域の皆様に親しまれ、その目を楽しませてきました。この広報誌を通じて、患者さんには最新の医療情報や健康管理のヒントを、地域の医療機関の先生方には当院の診療体制や専門分野をお伝えし、信頼関係の構築に大きく貢献してまいりました。

そういう意味で、この広報誌はホームページと並ぶ当院のブランディングの最前線を担ってきましたが、同時に職員にとってもインナーブランディングの旗頭として小倉記念病院を誇りに思い、仕

事の活力を高める情報誌であり続けました。

さて百という漢字の意味をAIに尋ねてみると「一」と「白」の組み合わせで、白は明るさや光を表す象形文字で太陽の光を表しているそうです。それに数字の一を加えて多くの光、明るさを表すようになり、後に十進法の重要な区切りとして100という数字を表す漢字として定着しました。そのほかに「非常に多い」とか「あらゆる」という意味でも使われ、百花繚乱、百発百中などと使われています。まさにこれまでのHANDSの歴史と記事は百花繚乱であり、アーカイブスとして長く残したいと思います。

デジタル化が進む現代において、紙媒体の広報誌が持つ温かみと信頼感は、かえってその価値を増しています。手に取って読むことができる情報誌は、患者さんや地域の皆様にとって親しみやすく、何度も読み返していただける貴重な媒体です。また、地域医療連携においても、顔の見える関係づくりにHANDSが果たしてきた役割は計り知れません。

結びに、病院は数多くの職員の手（Hands）が繋がることでその機能を果たしています。この繋がりには現在の職員の繋がりでもあり、患者さんとの繋がり、これまでの歴史の繋がりでもあります。今後もHANDSが皆様に愛され、当院が北九州になくてはならない病院であり続けるために有益な情報発信を続けていくことを願っています。次の100号に向けて、さらなる発展と充実を期待しつつ、100号刊行のお祝いの言葉とさせていただきます。

小倉記念病院病院長

腰地 孝昭

